高级日语系列教材

日本近代文学

Riben Jindai Wenxue

きんだい

王之英·主编

总主编·王健宜

南開大學出版社

图书在版编目(CIP)数据

日本近代文学 / 王之英主编. —天津:南开大学出版社,2006.11

(高校日语系列教材)

ISBN 7-310-02624-1

Ⅰ.日... Ⅱ.王... Ⅲ.①日语—阅读教学—高等学校—教材②文学史—日本—近代 Ⅳ.H369.4:I

中国版本图书馆 CIP 数据核字(2006)第 119327 号

版权所有 侵权必究

南开大学出版社出版发行

出版人:肖占鹏

地址:天津市南开区卫津路 94 号 邮政编码:300071

营销部电话:(022)23508339 23500755

营销部传真:(022)23508542 邮购部电话:(022)23502200

*

南开大学印刷厂印刷

全国各地新华书店经销

*

2006 年 11 月第 1 版 2006 年 11 月第 1 次印刷

880×1230 毫米 32 开本 10.625 印张 302 千字

定价:18.00 元

如遇图书印装质量问题,请与本社营销部联系调换,电话:(022)23507125

序　言

《高级日语系列教材》是为高等院校日语专业高年级（本科三、四年级以及研究生一、二年级）专门编写的，全套教材由语言基础、文学文化、口笔翻译、国情知识四个部分组成，共 12 种 14 册。它们分别是：《高级日语精读》（上、下）、《高级日语泛读》（上、下）、《高级日语口译》、《高级日语笔译》、《高级日语写作》、《高级日语听力》、《日本文学史》、《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》、《日本历史》、《日本文化》。

本套教材中的《高级日语精读》是天津市“十五”规划教材的重点项目，它以全新的体例和结构，展现了教材编写的新思路，反映出日语教学领域以教材引领的教学改革的积极探索。同时，《高级日语精读》以全新的视角和全新的选材，为日语教学本身提供了更为丰富的素材。它的 12 个单元 36 篇文章，从关注中国和日本、关注世界、关注人类的大视野出发，既有物质世界的问题，也有精神世界的问题；既有现实的思考，也有未来的展望。每个单元的文章都精挑细选，话题前卫、语言鲜活、视角独特、特色鲜明。《高级日语精读》既是本套教材的标志性成果，也是其他各册教材的编写宗旨。

本套教材的另一个特色是，有些教材是迄今为止国内外首次尝试编写的创新教材。例如，《日本现代文学》，在研究日本近代文学的基础上，勇于探索日本文学领域出现的新情况，着力在第二次世界大战结束、日本战败以来的文学发展过程中梳理出一条清晰的日本文学和社会的脉络，对于我们认识和把握日本文学和社会具有重要意义。

本套教材在体系上的规范也具有独到之处。例如，文学领域由《日本文学史》、《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》四

册构成，体系清晰、完整，对日语专门人才培养具有指导和规定性的重要意义。又如，《日本古典文学》、《日本近代文学》、《日本现代文学》均由若干课构成，打破了传统的编写模式，突出了课堂教学的特点，主题突出、目的明确，便于教学活动的开展和检查。

本套教材是南开大学日本语言文学学科三十多年来开展的丰富多彩的教学、科研活动的一个缩影，也是我们理论联系实际，一切从教学出发的一次探索和尝试。由于我们水平有限，教材中一定有很多缺点、谬误，诚恳地希望学界同仁和广大读者给予批评、指正。

王健宜

2005 年 5 月于南开园

前　言

《日本近代文学》是高等院校日语专业高年级学生用书，本教材具备如下特点：

一、明治维新后，日本经济气象一新，文化、文学在经济发展的刺激下，加之受西方影响，出现了与江户时代的戏作文学截然不同的新文化。第一本一改江遣风具有近代色彩小说：二叶亭四迷的《浮云》在一八八九年问世，从那以后日本文学界如春风吹过的花园，百花盛开，各个流派，风起云涌，各领风骚，呈现出一片姹紫嫣红。本书就从第一本《浮云》开始，精选了各流派的代表作家与佳作，辅以对作家的生活和创作过程的简介，力图将整个日本近代文学的缩影，行诸纸上。奉献给国内的文学研究者及学子们。

二、除了将作家作品做分门别类的介绍外，还将各流派代表作家的位相——在日本近代文学史上的地位和特征做了较为详细的译释。并且在本书开始时首先把近代日本文学概况展现眼前，以求使学习者开卷便有了一个日本近代文学的基本概念。

三、本书选取的小说大多写于上世纪初，其中很多那个时代的名词，对于当代日本人来讲也是非常陌生的，对于我们更是如坠五里雾中。所以，我们根据当时的历史背景对某些固定用法与词汇进行了诠释。

目前，国内关于日本的著作很多，但是从整体上把日本近代文学加以整理、概述及对作家进行简介的书籍却少之又少。甚至可以说凤毛麟

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

角。因此，我们按近代排列，形成整个流派体系，并详尽介绍作者与重要代表作。谨希望能为日本文学研究者们提供参考。如有不足之处，敬请指正。

王之英

二〇〇六年八月于南开大学

目　次

第１課　日本近代文学概論／1
１、日本の近代と近代文学の特色／1
２、明治時代の文学／4
３、大正期の文学／8
第２課　二葉亭四迷と『浮雲』／11
１、人と文学／11
２、主要作品解説／12
３、二葉亭四迷評価の位相／14
４、本文（第二編：第七、十六、十九回）／15
５、単語の解釈／34
第３課　泉鏡花と『高野聖』／37
１、人と文学／37
２、主要作品解説／38
３、泉鏡花評価の位相／40
４、本文／41
５、単語の解釈／50
第４課　国木田独歩と『少年の悲哀』／52
１、人と文学／52
２、主要作品解説／53
３、国木田独歩評価の位相／55
４、本文／56
５、単語の解釈／63
第５課　夏目漱石と『こころ』／65
１、人と文学／65

２、主要作品解説／68
３、夏目漱石評価の位相／78
４、本文／78
５、単語の解釈／91
第６課　永井荷風と『狐』／93
１、人と文学／93
２、主要作品解説／94
３、永井荷風評価の位相／98
４、本文／98
５、単語の解釈／110
第７課　谷崎潤一郎と『刺青』／112
１、人と文学／112
２、主要作品解説／113
３、谷崎潤一郎評価の位相／117
４、本文／117
５、単語の解釈／125
第８課　葛西善蔵と『哀しき父』／127
１、人と文学／127
２、主要作品解説／128
３、葛西善蔵評価の位相／129
４、正文／130
５、単語の解釈／138
第９課　田山花袋と『蒲団』／140
１、人と文学／140
２、主要作品解説／141
３、田山花袋評価の位相／142
４、正文／143
５、単語の解釈／175
第 10 課　芥川竜之介と『奉教人の死』／178
１、人と文学／178
２、主要作品解説／181
３、芥川龍之介評価の位相／189

４、本文／190
５、単語の解釈／202
第１１課　葉山嘉樹『とセメント樽の中の手紙』／204
１、人と文学／204
２、主要作品解説／205
３、葉山嘉樹評価の位相／206
４、本文／207
５、単語の解釈／210
第１２課　横光利一と『蝿』／213
１、人と文学／213
２、主要作品解説／214
３、横光利一評価の位相／216
４、本文／216
５、単語の解釈／222
第１３課　志賀直哉と『城の崎にて』／224
１、人と文学／224
２、主要作品解説／227
３、志賀直哉評価の位相／235
４、本文／236
５、単語の解釈／242
第１４課　島崎藤村と『破戒』／244
１、人と文学／244
２、主要作品解説／245
３、島崎藤村評価の位相／249
４、正文／249
５、単語の解釈／273
第１５課　川端康成と『伊豆の踊子』／275
１、人と文学／275
２、主要作品解説／276
３、川端康成評価の位相／278
４、正文／279
５、単語の解釈／296

第１６課　森欧外と『舞姫』／298
１、人と文学／298
２、主要作品解説／299
３、森欧外評価の位相／301
４、正文／302
５、単語の解釈／309
第１７課　太宰治と『富嶽百景』／311
１、人と文学／311
２、主要作品解説／312
３、太宰治評価の位相／317
４、正文／318
５、単語の解釈／328

第１課　日本近代文学概論

近代日本の文学概観

1、日本の近代と近代文学の特色

近代の意義　近代とは、精神の方面では近代的な自我のめざめによって個人主義の精神が強くあらわれた時代であり、政治の方面では中央集権的な法治国家の時代であり、経済的には資本主義の成立した時代であり、社会の方面でいえば市民社会が形成された時代である。そうした萌芽はヨーロッパでは文芸復興期以後すでにあらわれており、フランス革命（一七八九～一七九九）後にははっきりその様相を呈するようになった。しかし、日本では封建制度の崩壊した明治維新（一八六八）以後にはじめて発展態勢をあらわれたのである。

日本の近代　こうした明治の変革はもちろん日本内部の必然的な発展の過程でもあったが、それよりも外部先進国からかけられた圧力によることが大きかった。夏目漱石がその「現代日本の開化」（明治四十四年）のなかでいう「外発的」な日本の近代化ということが、日本の近代化を極めて特殊なものにしたのである。すなわち、ヨーロッパの先進国では、文芸復興以後数百年にわたる内発的な人間の覚醒と向上とがあり、それに伴う営々たる努力による諸制度の改革や物質的な発明、発見があって、かがやかしい近代がもたらされたのであるのにたいして、日本の場合は、封建制度の崩壊も外部からの力が促進した上に、維新後は、これらの先進国のいわば既製品であった近代文明を精神上の生みの苦悩を深く経ることなしに安易に模倣・摂取していたのであった。特に明治に入ってからの二十年ほ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

どの間は、日本がその独立の維持も危ぶまれた時代であって、政府はひたすらに「文明開化」「富国強兵」ということをモットーとして先進欧米諸国の物質的・機械的文明を輸入し、産業をおこして軍備を充実することに専心したのであった。個人主義を育成して近代精神を確立していくことよりも物的な力を増強することが第一とされたのである。したがって、政府の保護・奨励によって近代国家としての資本主義は上昇の線をたどっても、その精神的支柱となるべき個人主義・自由主義の遅々たる成長であった。政府は皇室中心主義・国家主義をとる政治上の方針からむしろ封建的精神の温存を心がけたところがあり、そのことは日清・日露の両戦争を経ることでいよいよ強固にされていった国家第一主義の思想によって、個人の尊厳や自由が軽く見られる傾向とともに、日本の近代化の上に精神面と物質面との著しい不均衡となってあらわれた。一方には、また都市と農村との近代の不均衡ということもあった。そうした大きな国家的・社会的な矛盾をはらんだままに大正に入ったが、第一次大戦の勃発（一九一四）による日本の急激な資本主義の隆昌は、一面に自由主義・個人主義の思想を盛んにしたたかに見えたが、しかし、これらの思想も、また大戦終結後の経済界の恐慌をきっかけとして起こった階級闘争の思想も、昭和期に入ると厳しい弾圧を受け、国民は軍国主義のかけ声のなかでずるずると太平洋戦争の深みのなかへひきずり込まれていった。敗戦後は、痛切な自覚から精神の近代化ということもとりあげられたが、それが着実に成果をあげてきたというわけにもいかない。日本の近代文学——明治以後の文学は、もちろんこうした経路でこんにちまでに到着した日本の特殊な近代を反映してきている。そして複雑な曲折を経ながら、ヨーロッパ先進国の文学と同じ水準に達していったのである。

日本の近代文学は個人の尊厳ということに気づき、人間の個性をどこまでも発揮していこうとするのが近代の特色であることはすでに言ったが、こうした近代では、文学の方面でもこの尊厳な個人に着目し、この個人を追究することが主たる目的となった。個人を追

究していく文学ではおのずから散文芸術としての「小説」が文学のジャンルの上の王座につくことになり、またその「小説」では、必然的に写実な描写がおこなわれることになった。こうしたあらわれは、もちろん西欧では十九世紀にはやく見られたが、日本の明治以後の文学、すなわち近代の文学でも、文学といえばただちに「小説」を考えるほど小説は文学のジャンルのなかの重要な地位につくようになったし、その小説でも写実的な描写が大切とされるようになってきた。

またこの近代文学では、日本でもはじめて「評論」が文学に一つのジャンルとしての地位を求めるようになった。ながく、評論というのは日本でも書かれてきてはいたが、近代になって文学のなかの一つのジャンルとして独立の位置を占めるようになり、実際作品と表裏して力学的に時代の文学を形成していくようになったのである。それからまた、発生時に「新体詩」とよれば、こんにちでは「詩」とよばれているものが、日本近代文学ではこれもまた一つの文学のジャンルとして新しく「評論」とともにあらわれてきた。個人を描く文学、写実を重んずる文学、「評論」や「詩」という新しいジャンルを加えた文学、これが日本近代文学であり、鎌倉の文学が武士の文学であり、江戸の文学は町人の文学であることに対して近代文学は市民の文学であるといえる。そして、古来の文学精神を「まこと」「もののあわれ」「幽玄」「わび」「さび」というように時代を追って考えてきた例にならって考えると、この近代文学は個人を追究して人生に「真」を求めようとする文学精神であるということができる。この日本の近代文学は明治二十年前後から、先覚者の努力でしだいに発見しはじめたがほんという日本の文学が近代化されたのは、明治四十年前後自然主義時代に入ってからであった。

なお、日本では一般に、明治以後こんにちまでの文学を「近代文学」とも「現代文学」とも大まかに区別しないで呼んでいる。しかし、もしこれを区別して考えるならば、「現代文学」というのはいつもその時点からさかのぼって三十年ばかり前の文学をさしていう

ようである。したがって、日本の場合でいえば、明治になってから昭和十年代半ばごろまでの文学を近代文学と呼び、それ以後こんにちまでの文学のことを現代文学と呼ぶということになる。現代文学というのはいまだ生きて流動的に動いており、定着していない文学ということであり、厳密には研究の対象としてまだ十分にとらえにくい文学ということになる。本書に収めたのは「現代文学」とは区別した意味の「近代文学」の小説である。

２、明治時代の文学

人間個人というものにこの世の最高価値を見出して、その個人の自我を尊重し発揮しようとする自覚を、近代的な自我のめざめと呼ぶが、この近代的な自我のめざめから浪漫主義の運動がおこり、この浪漫主義の運動がついには個我を確立していく。１９世紀前半にヨーロッパで焔のように燃えひろがった浪漫主義はそのようなものであり、着実にそこから近代が発展していった。この浪漫主義が人間そのものを重ずることから人間を描くことが近代文学の目標となり、その目標をとげるために散文芸術としての小説が重んぜられ、現実的な人間を描くことのために写実的方法がとられるということについては前にも幾度か述べてきた。

坪内逍遥（一八五九～一九三五）がその「小説神髄」（一八八五～一八八六）で文学の独自性を論じ描写の上で模写主義を唱導したことは近代文学を開拓していく上で誰かがすべき大切な仕事をかれがまずやったということで特筆すべきことであったが、逍遥の写実論をもっと徹底させた二葉亭四迷の文学論である「小説総論」（一八八六）からは、日本先駆的写実小説であるかれの「浮雲」（一八八七～九）が生まれた。しかし逍遥・二葉亭の写実論は森鴎外（一八六二～一九二二）の帰朝（一八八八）以後の熱烈な浪漫主義の提唱・実践と重なってはじめて深い意味を持つものであった。すなわち自我の近代的なめざめ→浪漫主義の文学→個人主義の文学→人間個人の追究・描写→写実的描写といった強い関係からいえば、日本

の文学の近代化にもっともはやく力を致し功をおさめたのは、逍遥・二葉亭・鴎外の三人であったといえる。しかしながら、鴎外が個我発揮の浪漫主義の文学を自ら実践しはじめた一八九〇年前後、日本は帝国憲法を発布し教育勅語を煥発して個我を抑圧し、個人の自由を制圧する国家厳たる方針をとることになったのであった。浪漫主義に火が点ぜられた時期にその火を国家主義、滅私奉公主義が上から強圧的に打ち消していくことになったであった。近代とは個人主義・自由主義の精神の時代である。しかし、日本近代では、その近代を精神的に支える基盤はついに構築され得なかった。日本の近代の精神的な痛刻な苦渋はこの時からはじまり、その苦渋と暗さはそのあとの日本の近代文学の上に色濃く投影していく。鴎外の後をうけたかたちで日本の国家主義的制約のなかで浪漫主義の運動に身を挺した北村透谷（一八六八～一八九四）の先覚者としての悲劇は時代としての必然であったとも考えられる。日本の浪漫主義はこういう事情中で、透谷・島崎藤村（一八七二～一九四三）らの同人雑誌「文学界」に示され、やがて詩歌中心の雑誌「明星」にひきつがれたが、力も微弱であり、期間も短いものであった。しかし、「文学界」の、西欧近代文学に親炙していた若い人たちと接触することで、硯友社的な文学のなかに低迷していた樋口一葉（一八七二～一八九六）は胸奥の崇高なその文学精神をめざめさせられ、「にごりえ」「十三夜」「たけくらべ」などの名作を書いた。泉鏡花（一八七三～一九三九）の「高野聖」に見られるような強烈で個性的な浪漫性は一般と隔絶した追随するもののない特異なものであった。

二葉亭や鴎外らの西欧ふうの新時代の小説があらわれはじめた明治二十年初頭からの十数年間、文壇を性制圧していたのは旧文学の伝統のなかにいた尾崎紅葉（一八六七～一九〇三）中心の硯友社の文学であった。逍遥写実論から表面的・皮相的な写実を尊び、封建的人間観・道徳観・恋愛観を新時代の風俗のなかに盛ったかたちの前近代的な文学であったが、低俗な読者には二葉亭や鴎外の斬新名作品などよりも親しまれた。硯友社の文学は旧時代の文学が新時代

の文学へ近代化されていくその架橋的・過度的な文学なのであった。明治二十年代の前半には、哲学的・東洋的で男性的風格のある幸田露伴（一八七六～一九四七）の文学も流行して、この時期、創作界「紅露時代」と称された。この時期の紅露の文学を前近代的な文学として排撃したのは、北村透谷であったが、キリスト教的な平民主義民友社の中にいた国木田独歩（一八七一～一九〇八）もまた紅葉の文学を封建時代の文学として排斥した。それだけに独歩は清新な純真な詩人的な作家であった。田山花袋（一八七一～一九〇三）もまた一時期を硯友社の周辺で作家修業をしていたが、しかし、その素質は自己を大切にし自己に誠実な浪漫的なところが濃く人間尊重の精神のあついことで硯友社同人とは異質であった。そして硯友社をみとめない「文学界」の同人たちに親しみを感じたり国木田独歩と親友となったりすることでしだいに硯友社の気風から脱皮して現実をみつめる作家に変っていた。日清戦争がすんだあとには国民の自覚の高まりで、硯友社の作家たちのなかにも泉鏡花や川上眉山のように観念小説を書いたり、また広津柳浪のように深刻小説を書いたりする作家があらわれて著しく現実的な風を加えてきたのであった。また硯友社の圏内で作品を書いていた少杉天外また永井荷風（一八七九～一九五九）などはフランスのゾラの科学的な方法――遺伝と環境が人間を決定するというゾライズムの作品を書いたりしたのであったが、そうい現実的な風潮の深まりのなかで花袋は濃厚な浪漫的な詩人・作家からしだいに自然主義的な方向に向かっていた。藤村も日本はじめての近代詩集『若菜集』をはじめ、いくつかの詩集を出版した浪漫的詩人であったがやはり花袋と同じ明治三十五年（一九〇二）ごろには自然主義的な方向に踏み込んでいった。

日本の自然主義時代は藤村の『破戒』（一九〇六）ではじまった。つづいて花袋の『蒲団』（一九〇七）が自然主義の第二弾となった。「現実暴露」「伝習破壊」をモットーとして平凡な日常生活を、美も醜も問わずどこまでも掘り下げていくことで、浪漫主義が果し得なかった個我の確立をとげようとしたのが日本の自然主義であった。

西欧の自然主義が浪漫主義の反動としておこり、科学的人生観で個我が崩壊・解体した上に築かれたことに対して日本の自然主義は日本の近代の特殊なありかたに従って、浪漫主義の延長の上に個我を追究し確立しようと苦闘したのであった。この点が西欧の自然主義と日本の自然主義とがはっきりと根本的にちがうところである。そして、その個人の追究が国家や社会と絶縁し孤立した個人の追究にとどまらざるを得なかったために、個我の追究はかえって個我の無力さや空しさに突きあたるほかはないものとなった。日本の自然主義の作家は藤村・花袋をはじめとして徳田秋声も岩野泡鳴も、また若い世代の正宗白鳥（一八七九～一九六二）も、そうした自然主義文学の傾向として私小説へ傾斜していった。日本の自然主義は個我の確立を求めて逆に個我を圧殺することになってしまったのである。しかし、この自然主義時代に日本の近代的・写実的描写は確立され、言文一致体もあらゆる分野に普及し、評論も近代的評論として樹立されるに至った。自然主義の文学運動は日本の文学を根底からくつがえし近代化した最大の文学運動であった。

明治四十年（一九〇七）前後の数年間、自然主義文学運動が嵐のように吹き荒れているとき、この動きに同調することなく、批判的態度を持していたのは鴎外と夏目漱石（一八六七～一九一六）であった。現実主義・人生主義の自然主義に対してこの両家は理想主義的・芸術主義的なところがあった。鴎外は軍医として最高の地位に達してから文壇に復活した。同じ知性的作家である漱石の活躍に刺戟されたからである。明治末期から歴史小説に転じ大正期に史伝ものに移った。漱石は「吾輩は猫である」（一九〇五～六）で一躍文名を挙げ、芸術主義的な作品を多く書いたが、朝日新聞入社（一九〇七）後の「三四郎」以後しだいに深刻な人間の問題と対決するようになった。鴎外の系統から反自然主義耽美派（雑誌「スバル」「三田文学」に拠った作家たち）があらわれてきた。耽美派の有力作家は永井荷風と、荷風を師と仰いだ谷崎潤一郎（一八八六～一九六五）であって、この両家はともに大正から昭和の戦後へもその作風を一

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com